

一杯の酒、一首の歌を

鈴掛真

毎週火曜日は、親友の女性がバーテンダーとして働いているラウンジバーへ赴き、馴染みの仲間たちと集まるのが習慣になっている。加えて新たに出逢う多種多様な業界の面々から話を聞くのが楽しみになっているのだが、僕自身が短歌の作家でありつつ同性愛者であることを公然と話すために、むしろ相手から物珍しそうに「もっと話を聞かせて」と興味津々に接してくれる。

先日、社会運動家として同性愛差別撤廃を訴えていた東郷健氏が亡くなった。氏のような活動家が四〇年以上前から発言し続けてきても尚この国では法のただ一つもセクシャルマイノリティに優位な形で刷新されていない事に改めて驚かされる。しかし僕が感じるこの驚きを、どれだけの同性愛者が同様に感じているだろうか。

ある時、ファストフード店で隣のテーブルに居合わせた学生達が、ゲイタレントについて話題にしていたことがある。「あれってキャラなだけで、本当にゲイなわけじゃないんですよ？」と言うのだ。確かに、ゲイキャラクターとしてリック・マーティンの曲に合わせて卑猥な言葉を叫ぶ芸人もいたが、実際に同性愛者であることを公言しているタレントも多いい中で、彼らの勇気あるカミングアウトは若者にとって、ただの冗談にか聞こえないのかと途方に暮れた。この件に限らず大前提として、同性愛者は同性愛について残酷な程に無関心なのだ。

例のラウンジバーで仲を深めた同性愛者には、初めて出逢った同性愛者が僕だという人が何人もいる。それまで彼らにとってメディアの中だけでは存在しないと思われていたゲイというファンタジーが、初めて現実となったのである。若者の政治離れは今後も深刻化し、社会運動家の発言は更なる無力化が懸念される。しかしたった一杯の酒で交わす対話が、社会運動家の発言よりも力を持つ事がある。僕はその可能性を信じ、一杯の酒の代わりに一首の短歌で同性愛者との対話を試みることにした。

(すずかけ しん・歌人)